

佳作
(子どもの部)

「おばけと命」

荒川区立尾久小学校六年

高橋 瑠亥

「人はなぜ生まれ、死んでいくのか。」

テレビや本でよくある話題です。僕の身近に亡くなってしまった人はいません。実際にはいるが、当時の僕は、ショックという感情に気が付くことのない年齢でした。しかし今は違います。大事な人がいなくなったら、きつとショックは大きいでしょう。柳田先生にはそのような経験がありますか？

この本は主人公の大切なじいじが、亡くなった次の日の夜、忘れ物を探しにおばけになって帰っ

てくる物語です。

僕には会ったことのないジジがいます。ジジは僕の生まれる一か月前に亡くなったそうです。僕はジジの生まれ変わりかもしれません。ジジのお葬式の時に僕はずっとママのお腹を蹴っていたそうです。これって僕も悲しんでいたかもしれないと都合よく考えられますが、もちろん記憶はありません。

だから、僕のママが明日死んでしまったらと考えてみました。

ママはよく仕事から帰ってくると、体中が痛いらしく、死んだように寝ている時があります。僕が学校から帰ってきてインターホンを鳴らしても気付いてくれない時があります。そんな時は鍵で家に入り、寝室へ行くと、だいたいママは寝ています。

そして僕が「ただいま」と言うと、「おかえり」と言ってくれます。これは普通の出来事。

もし、その時ママが起きなかったら、そのまま死んでしまっていたらと改めて考えてみると、ちょっと怖いです。ちょっとどこか恐ろしい感情が次々と湧き出てきます。僕はいかにありがたい毎日を当たり前に過ごしているかに気が付きました。

もし、会ったことのないジジがおばけになって出てきても、「おじいさんのおばけが出た！」と怖いだけかもしれないませんが、もしママがおばけになって出てきてくれたら、すごくうれしいと思います。抱き着いて「ずっと一緒にいてよ！」と言います。一緒にどこか行きたくなってしまいます。大切に大好きな人がおばけになって出てくるのは、こういうことなのかと、この主人公の行った行動が

少しだけ理解できるようになりました。

この夏僕はこの本を通して、身近な人の死についてすごく考えました。初めてたくさん想像してみても怖くなったり、寂しい気持ちになりました。しかし、いつか僕が死んでしまった時に、また大好きな人達にまた会えるのかなど、この本を読んでほんの少しだけ安心しました。

「なぜ生まれるのか。」多分それは大好きな人に会うため。

「なぜ人は死ぬのか。」多分それも大好きな人に会うため。

柳田先生はどう考えますか。